

佐渡・世阿弥の来た道を行く

伊達美徳

掲載：伊達美徳サイト <まちもり通信 > <http://homepage2.nifty.com/datey/>

ダム湖ができた

2006年2月、春の未だこない佐渡島に渡ってきた。目的は、山間地にできた水利ダム湖周辺の整備について意見を求められての視察だったのだ、面白い発見のある旅となった。

2日間のみで分かることは少ないが、視察の目的とするところは、「小倉ダム」がもたらす自然と文化の環境変化を、この地域に暮らす人々にとってより良い方向へと生活環境を変化させるために、どのようなことを考えて今後の地域整備にあたるか、そのヒントを提供することにあると考えた。

特に、このような中山間地域における開発に関して、景観形成のありかたを考えてみたい。私の考える景観とは、人々の目に触れる地域の姿であるが、そこにはその地域のもつ潜在的な生態及び文化の総合的表現（環境的履歴）として表れ、それを見る人感じる人の文化（人間的履歴）に訴えて成り立つものである。環境とほとんど同義語ととらえている。

ここでの私は、地域のこれまでの環境的履歴に、小倉ダムによる新たな履歴が加わることで、環境と景観が激変して軋轢をもちたらずものではなく、これまでの延長上に地域住民にとって暮らしよくなる環境をもちたらず景観づくりの基盤となるものはなにかそれを視点としたい。

農業不振の時代のいまどき、どうして小佐渡山地の中に、佐渡最大の農業用水ダムをつくるのかと、現地でこの国営事業所の方に聞けば、佐渡の国産米は魚沼産につぐ美味しいコシヒカリであり、ブランド米として利益が上がる農業となっているのだそうである。ここから送水管が佐渡の田畑にも山間のごとくめぐらしたい。

今、ダムは完成して貯水を始めた湖はまだ浅く、春を待つて静かに身を鎮めていた。やがて満水となれば、あたりの風景も大きく変わるだろう。

現地を見て景観の基盤を考える

3月はじめという季節柄、植生を明確に知ることが難しく、またダム周辺の植生調査資料がないため、基本となる植生景観に関しては別に調査が必要である。

佐渡の植生域は、中央の国仲平野及び海岸部はヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林帯）に、両側の山地部はブナクラス域（夏緑広葉樹林帯）に、それぞれ分類される。

小倉ダム周辺地域はブナクラス域であり、林地の現存植生は2次林のミズナラ（？）が優先し、今の季節では緑は杉林に見られるのみである。2次林は、かつては天延のブナ林であったものを伐

小倉ダムの完成予想図
(佐渡農業水利事業所WEBサイトより)



●小倉ダム湖上流からの全景
2006年3月7日



採（小倉地域は船材
料供給地であったと、
小倉集落の物部神社
の案内にある）した
あとに自生する代償
植生であり、それを
薪炭燃料として伐採
そして自生を繰り返
し、その落葉は田畑
の肥料として利用し
ていた。かつての棚
田（千枚田）の肥料
は、そのようにして
まかなわれていたの
だ。

その繰り返しだが、
今の集落やダム湖の背景にある山林、棚田、千枚田
の景観を形成したのである。農耕文化のつくりあげ
た地域景観である。

この景観に加えて、新たにダム工事による巨大な
土木構築物として、堰堤と擁壁が登場している。こ
のダムが農業用水用であるということは、農耕文化
の現代的な景観が生まれたことになる。歴史を積み
重ねたこれまでの農耕の履歴の上に、ダムという新
たな履歴を書き加えるときに、無理のない文化的ス
テップを上げる必要があるだろう。

一方、生態系として留意することは、ダム湖の巨
大な水面は、水生動植物に大きな変化をもたらすし、
水環境は周辺の微気象に変化をもたらすし、植生景観
も変化がおきてくるであろう。



東海岸の松崎にある日蓮と世阿弥の着岸の地の碑



「能楽の里」の佐渡には、機械仕掛けの人形が
能「道成寺」を演じる観光見世物もある



小倉の地は、国仲平野と佐渡西岸の松ヶ崎港を結
ぶ道筋にあるということは、かつて流刑人たちがた
どった道筋であることに気がついた。長谷寺や松ヶ
崎には、果たせるかな日蓮、世阿弥の名が案内板な
どに見える。

鎌倉時代の大宗教家・日蓮は鎌倉幕府にたてつい
た罪で1270年に、日本のオペラ能楽の大成者の
世阿弥（観世元清）は、足利義教の気まぐれで罪な
くして1434年に、いずれも松崎に到着している。
そのほかにも多くの流刑者たちがこの道あたりを行
つたろうから、いわば他の地からの文化流入ルート
であるという、歴史文化の景観が見えてくるのであ
る。

山村につちかわれた地域の農耕文化と、本土から
入ってくる異文化の交流、それがこの地の景観の基
礎を成している。

世阿弥が来た道

小倉ダムにかかわる地域整備には、中山間地の活
性化というテーマが欠かせない。これらの景観的基
盤を、地域の中で、佐渡の中で、生かしていくスト
ーリーを組み立てて、地域の人々がそれを文化とし
て育てていく仕組みが必要である。

小倉峠、小倉川源流の滝、棚田、千枚田、小倉湖
と公園、小倉ダム、小倉集落、物部神社、県営小倉
川ダム、長谷寺そして畑野の市街地へとつづく小倉
川流域をひとつの文化圏としてとらえて、小倉ダム
を中心として物語をいくつか展開して結びつけよう
佐渡における能楽の隆盛は、17世紀江戸時代にな
って佐渡金山奉行であった大久保長安によるものと

されるが、日本における能の創始者が世阿弥（観世元清）であり、その世阿弥によって佐渡における能楽は創始されたという大きな意義を持っている。この能の到来の道として小倉川の流域をみる事ができる。

「能楽の里・佐渡」に能がはじめて来たのは15世紀のことだった。能を完成させた役者であり演出家であり作家であり理論家であった天才・世阿弥は、当時の將軍・足利義教の気まぐれの勘気に触れて、1434年、理由もなく71歳の老いの身で若狭小浜を船出して佐渡配流の身となった。

5月4日に京を発つて月末にいたってよつやく、「佐渡の海、大田の浦に着きにけり、大田の浦に着きにけり」と、世阿弥が佐渡の地で書いた『金鳥書』に記している。

大田とは多田であり、松崎であるとされている。そして小佐渡山地の小倉峠よりも南の、今はなくなつた山道を馬と徒歩で登り越え下つて、長谷寺に参詣し、金井町の新穂まで約10キロメートル余の道のりが書かれている。

この世阿弥のたどつた道になぞらえて、名づけて「世阿弥街道」を新たに私は構想しよう。

小倉川源流にあるという大滝

小倉ダム湖の上流の棚田

小倉ダム湖右岸の小倉千枚田

小倉ダム湖と公園

ロックフィルの小倉ダム

小倉の集落と物部神社

県営小倉川ダム

豊山長谷寺

と、現県道とは別に、小倉峠から小倉川沿い約7キロメートルのトレッキングルートをつくるのだ。松ヶ崎方面行き山越えの路線バスの小倉峠停留所で下車して「世阿弥街道」を歩いて長谷寺まで下ればよい。

それは日蓮や世阿弥などの流人の道であり、都や鎌倉からの文化の入つてきた道になぞらえるのだ。ダム湖に張り出す半島に公園を設ける計画があるという。それならば、そこに野外能楽堂をつくりたいものだ。佐渡には野外能楽堂のある神社が多い。もう10年も前だったか、佐渡能楽堂めぐりをしたことがあるが、新たなそれもほしい。

たとえば、小倉集落にある由緒ある物部神社の別社（奥社）を半島に勧請して、境内に野外能舞台を設けるのである。桜の花盛りの頃、その花の下で能楽公演をする。そして長谷寺の別院（奥の院）も

あれば完璧である。

寺は県立の公園に設置は無理だが、民有地に設けるならば可能だから、公有地には公園事業として能舞台を、民有地には社寺を置くのだ。この二つの社寺が世阿弥街道のコンセプトを明確にし、歴史的景観として意味を持つてくる。

農が栄えた小倉千枚田

小倉ダムの周辺には棚田水田が数おおくあつて、耕作放棄もあるが中山間地らしい風景の中で米作りが今も行われている。

中でも佐渡の風景百選のひとつになっている「小倉大ひらき」と呼ばれる千枚田（棚田）は、急傾斜



人間のつくった地形ふたつ
上は土木工事で山を削り石を積んだ小倉ダム
右は農業のために急斜面に営々と築いた小倉千枚田

地を急階段状に刻み込んで、ひもの様に細長い田を積み重ねている風景は、他には見られない迫力がある風景である。

さすがに 今では生産の場としての機能維持は地域の農業労働力の減少で難しく、そのうちの一部がNPO活動による社会貢献活動で支えられているという。この農耕文化の風景を、文化的な資産として後世に伝えることは、日本の厳しい自然環境を改変しつつ利用して、自然の中に生きてきた人間の英知を見る意義がある。

ダム湖のこちら岸に千枚田の急傾斜地を統御する古来からの知恵と技を見せる一方で、あちらの岸には小倉ダム建造のために山を削って、現代土木工法による急傾斜地統御技術が姿を見せている。これら古来の知恵と現代の技術を比較して、環境と景観の面から学習することも大いに意義があるだろう。

「小倉大ひらき」千枚田の景観を維持するには、生産の場としての役割を失った今では文化財としての維持方法をとるべきであるから、公共投資と非営利組織の組み合わせによる方法を模索する必要があるだろう。

ただし、のんびりしていると、千枚田は草が生え樹木が伸びて3〜4年で自然に戻る。日本の自然の復元力はたくましい。そうなると再び千枚田に戻すのは困難になるから、早期に手を打つ必要がある。

ダム湖周辺の耕作中の棚田についても、都会人との契約による参加型産直型耕作方式を採り入れることも、この地域の農業と農業文化景観を保全する方策となるだろう。

ここの棚田で収穫する米に、小倉の棚田米は佐渡の米でも特に美味いという付加価値をつけることもあるだろう。例えば、九州宮崎の椎葉集落では棚田米を「流水米」と称しているが、独特の美味さを持っている。

土木構造物と自然の調和

ダムや切り土法面擁壁、ダム湖等の巨大な人工の構造物が自然地形地物を改変して埋め込まれた現況の景観は、かなり異形と言ってもよい姿かたちである。これらの構造物を自然に景観と調和するように修景を行う必要がある。基本的には植生の復

原であるが、それは造園的な手法と生態的な手法を適材適所に適用することが重要である。

時に、ダムや擁壁の面にペンキやタイルで絵を描いたり、植栽で文字を描いたり、あるいは緑に調和すると緑のペンキを塗るようなことが、修景として堂々と行われる例があるが、これらは最も慎まなければならぬ。周囲と調和しないばかりか、時間経過の汚れとともに醜さが増加するばかりである。

小倉ダムの場合には、造園的な修景は、ダム湖に張り出す半島部の上部の公園のみに限るべきである。しかも、半島の周囲は潜在自然植生種の樹林帯で囲むようにしたい。それはまさに物部神社別社と長谷寺別院の鎮守の森である。

コンクリート擁壁部の植栽修景は、あまりに急傾斜で土がつきにくいだろうが、低木類の定着に期待をするとしても、いずれにしても他の地形とは大きく異なる形態と特殊植生で異形の景観とならざるを得ない。

対岸の似たような急傾斜の人工物「小倉大ひらき」千枚田（棚田）は、小段擁壁の植生の連なり重なりで長い間に景観的地位を確保したが、コンクリート擁壁の新千枚田の今後の景観変化と比較する研究の材料としてはじつに興味深いものがある。少なくとも上部の法面と小段には植樹は可能であるように見受けられるので、潜在自然植生種の復原を期待する。

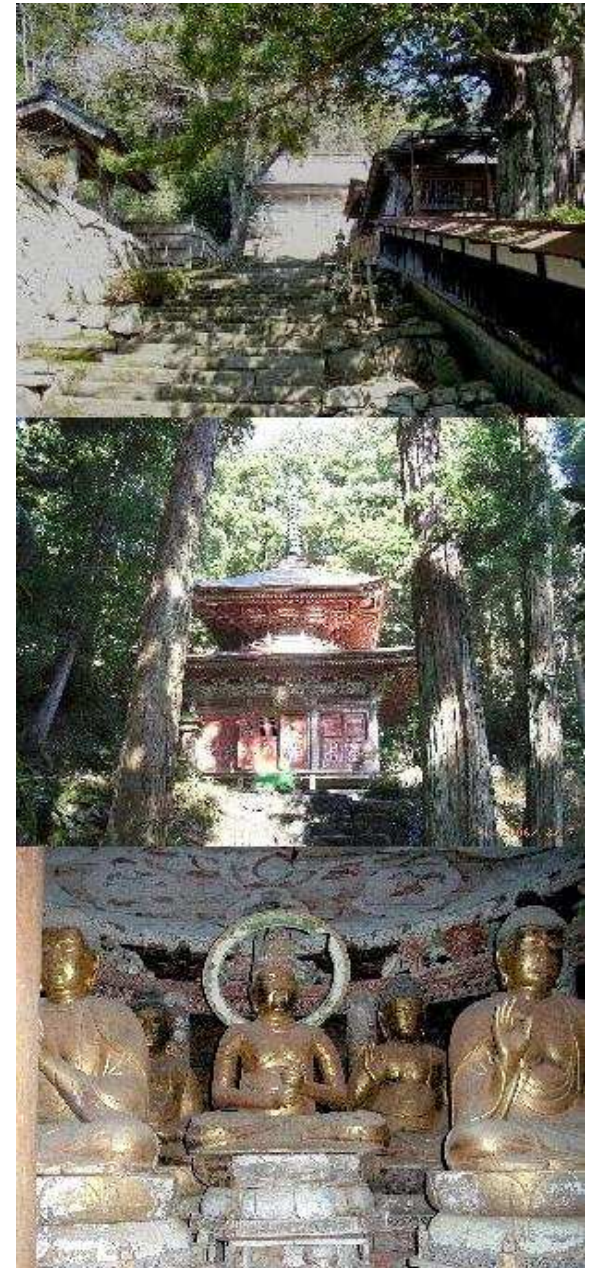
特に田畑として保全する必要のない耕作放棄棚田や伐採後のスギ林のあとには、この地域の潜在自然植生種（ブナ、ミズナラ等）の苗木を密植して、この土地本来のブナ林に戻すことを促進することがよい。

それには種から苗木づくり、植樹そして手入れまでを行うための仕組みも必要になる。千枚田保全と



小倉集落の典型的な美しい里風景
上は物部神社あたり、下は農家と屋敷林





あわせて学校教育、社会教育の場として、非営利活動組織を地域と都会を結んでおこして運動することがよいであろう。

ダムを囲む山々に、ブナ林が復元すれば、それはかつてのこの地を覆っていた自然景観であり、それは最もこの地に適している本物の自然の姿であるし、同時に樹木にも森床にも水を豊かに水を含む水源の森としてまさに小倉ダムの効果を高めることになる。

小倉の里から長谷寺へ

ダムからしばらく小倉川を下れば、その名の通り小倉の集落がある。小倉川の作った盆地に、田畑、人家、神社、竹林、森が、まさに典型的な里の風景をつくりあげている。

さらに下ると長谷の集落があり、ここには実に素晴らしい境内を持つ長谷寺がある。

世阿弥の『金島書』に、「そのまま山路を降りくだれば、長谷と申して、観音の靈地にわたらせ給ふ。故郷にても、聞きし名仏にてわたらせ給へば、ねんごろに礼拝、その夜は雑太の郡、しんほといふ所に着きぬ」とある。

今は長谷寺と書いて「チヨウウコクジ」と読ませているが、世阿弥はカナで「はせ」と書いている。大和の長谷寺の写しであることは、その階段の参道廊によく現れている。長谷寺が今の形で世阿弥の時に既にあつたとするのは無理だろうが、ここに来たことは間違いない。長谷という名に、大和を思い出して礼拝して配流の身の無事を祈ったに違いない。はつきりとは分かつてはいないが、2年ほど後に島を出ることができたようだ。

長谷寺の境内は、森の中に刻み込まれた石段・坂道・小段広場が続き、プロポーシヨンの良い建築が

いくつもある実に美しい風景であり、これは大発見であった。ここには歴史文化が明確に目に見える形で存在していた。小倉川流域文化圏における「世阿弥街道」の花である。

以前に野外能楽堂を訪ねて佐渡中の神社境内を巡ったときにも増して、佐渡にはまだまだ奥深い文化があると、いまさらに思い知った。思索と里づくり構想の旅であった。

(2006・04・13)

(参考文献『世阿弥配流』(磯部欣三

1992 恒文社)

佐渡市畑野の長谷寺は素晴らしい風景の境内と仏像彫刻がある
上：観音堂への参道
中：五智堂と呼ばれる多宝塔
下：五智堂内の5仏像、